

自信育み全員が合格

ここにいるよ

沖縄子どもの貧困

第3部 学習支援(2)

②

「志望動機は、この高校で資格を取りたいからです。3月、浦添市立森の子虎童センターに中学生の緊張した声が響いた。県立高校入試の直前、無料塾の生徒たちは面接の練習を何度も繰り返した。

「何の資格ですか?」面接官に投げたボランティア講師の友利和也さん(28)が問い返す。「えーと、何だったはず?」それ聞えないうちやバイだろ。やり直し」

面接日数が不足気味で準備不備の中学生たちにとって、入試では面接の重要性が高い。身なり、入室の仕方、座り方、答え方などを友利さんは入念に確認した。自分の短所を言った後は必ずフォローの一言を入れるなど細かい点も丁寧に指導した。

「自分の短所は始めが早い」とですが、高校生になったら粘り強く頑張りたいです。長所は、特にありません」
「あー、ダメダメ、特にありませんは絶対ダメ」。友利さんがすかさず指摘を挟む。「何でもいい、自分のいいところを言おう。アビールの場なんだから」

面接を徹底長所気付けさせる



無料塾で講師を相手に入試面接の練習をする中学生。3月、浦添市立森の子虎童センター

が明けても受験モードに切り替わらず、大城さんや職員を心配させた。無料塾を休みがちな学生も増え、1人しか来ない夜もあった。「3歩進んで、4歩下がっているような毎日」。大城さんがつぶやいた言葉に、学習支援の難しさがにじみ出ていた。多くの子が焦りだしたのは入試の1週間前。最後の予習が本気の「高校入試の一夜漬け」で初めて見た「ど」と顔を抱えていた。

結局、県立高校を受験した人は全員が合格した。一番手を焼かせた男子生徒は発表の日、「児童センターを訪れ、「友利先生のおかげだし」と照れながら初めて感謝の言葉を口にした。「本人たちの知らないところで周りの大人が慌てたり、心配したりしていたこと、この子らもいつか分かる日がくるかな」と。大城さんがうれしそうにつぶやいた。

半年前、進路を考えている子はほとんどいなかった。「やりたいことなんか何もない」「おれが行ける高校なんかはない」「先生言っていたせいで別にバイトすればいいさ。そんな反応ばかりが返ってきた。さまざままな事情で親が聞かない家庭

の子が多く、周囲をモデルとする大人がいないこともあり、将来の希望を持てずにいた。森の子虎童センターの大城啓子(31)は「自分の進路を真剣に考えさせたかった」と無料塾を始めた理由を説明する。「生まれ育った環境のせいにしては言わないが、人生志向に合わせた、自己肯定感を育てることが絶対必要だと思った」だがヤンチャな子たちは正月

田嶋正徳 取材班・火・木曜日掲載